

まえがき

はじめまして、占い師で霊能者の響子と申します。

東京を中心に活動していて、占いをしたり占いを教えたり、占いやスピリチュアルに関するイベントを開催することを仕事にしています。

今でこそ、私は占いやスピリチュアルに関心を持ち、日々の中でそれを活かしていますが、もともとそうだったことに関心があるタイプではありませんでした。家族にも身のまわりにもそうだったことに関心のある人はいなかったし、占いやスピリチュアルに関する情報が入ってくることもあまりなかったのです。

ただ、そんな私が霊の声を聞くようになったのは、十二歳のときでした。

ある日突然何もないところから人の声が聞こえるようになり、それが止まることはありませんで

した。そのときは霊の声が聞こえたなんて思わず、ただ「病気になった」と思いました。

もともといじめられっ子で友達はいないし、相談できるような相手はいなくて、何年も悩みました。それから十六歳のときに精神科の病院へ行き、薬を貰うようになりました。

「霊の声が聞こえる」ってあまり想像がつかないかもしれませんが、とにかく何人もの人に同時に話しかけられているような状態に近いかもしれません。

とにかくうるさくて、夜もあまり眠れません。そして薬が効くこともありませんでした。

その後だんだん自暴自棄になり、あまり家にも帰らず、十代の後半から適当にふらふらして過ごすようになりました。そしてそれは二十代の前半まで続きました。そんなどんだ底の状態で出会ったのが、私が小さい頃に亡くなった祖父の霊でした。

たまたま私が実家に帰ったときのこと、亡くなった祖父の写真が机の上に置いてありました。それは何度も見たことのある写真だったのですが、なぜかその写真がとても気になり、みんなが寝静まったあと、その写真をこっそりと見にいきました。

その写真を目の前にした途端、なぜか突然涙が止まらなくなり、その後上のほうから声が聞こえ

てきたのです。その声は私にこう言いました。

「人を助けなさい」

「それを一年以内にやりなさい」

それまでは私に話しかけてくる声はうるさく、迷惑なものだと思っていたので、自分のことをこ
うやって見ていてくれて、助言をくれる声も存在するなんてそれまで知りませんでした。

その出来事に非常に感動した私は、人を幸せにすることを仕事にしようと考えました。そしてま
ずは、身のまわりの人たちが助かるような何かを始めよう！ と決意したのです。その後すぐにカ
ラーセラピーの学校に通いはじめ、人の心理や色が人に与える影響、カウンセリングスキルについ
て学びはじめました。

まだその頃は、目に見えない世界に関しては半信半疑。一度そういった体験をしたぐらいでは、ス
ピリチュアルを信じられない、素直ではない性格でした。

そんな中、ある日事件が起こります。

それまでの人生で一番仲良くしてきた親友であり恋人が、突然死してしまつたのです。そして祖父の霊に出会つたびつたり一年後の日……その日が彼のお葬式になりました。

「一年以内に人を助けなさい」

その言葉を聞いた日、私は本当に感動して、半信半疑ながらもこの一年で何が起るのか楽しみにしていたのです。それがまさか、一番幸せになつてほしかつた相手がいなくなるなんて、思いもせませんでした。

そのことがあつてしばらく落ち込みましたが、それは同時に自分の人生をこれからどうしていきたいか考えるきっかけにもなりました。

そして、祖父の「人を助けなさい」という言葉を信じて、これからの私の人生は「人を幸せにする」ということに力を使おうと考えました。

それ以降「人が幸せに生きるにはどうしたらいいか?」「人が心から満足して生きるにはどうした

「らしいか？」「そのために私ができることは何か？」ということをそれまで以上に考え、追及することになったのです。

それでセラピストとしてお仕事をしながら、さまざまな勉強、活動に力を入れました。ボランティアをしたり、仏教や哲学、人の心理について学んだり、写経をしたり、滝に打たれたこともありましたね（笑）。

そしてその活動を追及しつづけた結果、占い師と霊能者になりました。

私はたくさん遠回りしましたが、今では私自身幸せを感じながら生きられるようになり、霊の声も意識的に聞かないようにすることもできるようになりました。それで占い師、霊能者としてお客さまに恵まれ仕事を続けられています。

この本は、私がそうやって追及して学んだ、心から自分の人生に満足して生きる方法について書いたものです。

私がこの本を通じて伝えたいことは、自分のマインドを整え感情を大切にすることで、人は誰でも幸せになれるということ。それから自分自身をよく知り自分に合ったものや道の選び方をすれば、いくらでも道はひらけるといことです。

—そのことを、私の体験と一緒に伝えしていきたいと思います。

この本を読んだことが、少しでも皆さんの人生を明るくするきっかけになったらうれしいです。